■ プログラム受講生からLEAFへのメッセージ

この何十年、経済需要と人口増による工業の発展と技術開発は、地球に大きな被害を与えてきました。開発という攻撃により、すでに地球に多大な汚染がもたらされています。人間が人間同士、また自然と協調して生きる方法を学ばなければ、未来は全ての人にとって不確定なものになるでしょう。ですから、現在、環境教育、環境に対する意識を高めること、環境保護は、最重要課題です。

人間は、自分たちが起こした環境破壊を修復し、地球の環境を管理し共に守る次の世代を育てる責任があります。つまり、今を生きる子どもたちは、次の世代の子どもたちが同じような環境を享受できるよう、地球環境とどのようにつき合い、大切にしていくべきか、学ぶ責任を持っています。環境を大切にする子どもを育てるということは、彼らに必要な知識と技能、価値観を与えることを意味します。子どもに自ら環境学習活動を行う権限を与えることによって、地域の暮らしに根ざした環境学習活動が形作られ、地域のリーダーや市民が活動に関わることで意識が高まり、また地域住民が環境保護やその責務を遂行することを後押しすることになります。市民や地域住民への環境教育は、彼らに環境への意識と関与を強める機会を与えることで、達成されると思います。具体的には、地域レベルの調査プロジェクトや環境学習活動を実施したり、地域のリーダーを育成することで、持続可能な地域を育むことができます。

NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）でのインターンシップは、持続可能な開発のための教育（ESD）という概念が西宮市でどのように推進され、実施されているのかを知る機会となり、理解を深めるものでした。

インターンプログラムで得た知識や経験は、私たちのESDに対する考え方や理解を完全に変えるものでした。LEAFを通して、ESDは、子どもに環境について教えることだけでなく、また自然と人間の関係だけに焦点をあてたものではなく、より幅広いものであると理解しました。持続可能な開発を行うために最も大切なことは、自然と人間の関係だけでなく、社会の中での人と人との関係に注目することです。私たちがインターンシッププログラム全体を通じて得た知識や経験は、自国に戻って実施する機会を得られれば、自国の環境や状況に適した応じたやり方で採り入れ、適応し、修正することができるでしょう。

インターンシップ・プログラムの方法については、講義主体のもの、体験を行うもの、両方が行われました。講義の手法は従来の形でしたが、ESDが西宮でどのように実施されているか大変よく理解できるものでした。様々な会合、活動、イベントに参加することで、持続可能な発展を促すために、教育がどのようにツールとして活用されているかを具体的に知ることができました。

LEAFは組織として、インターンの学習の大きな助けとなってくれています。ESD推進において多くの経験を積んでいるLEAFは、学生のインターンシップ・プログラムを実施するのに最適な団体です。

ありがとうございました。

- 6/2 ・LEAFプロジェクト説明 ・今後の予定
- 6/4 こども農業塾活動支援
- 6/7 ホタル観察会
- 6/9 ・企業と進める環境学習支援 テーマ：池の水質浄化
  LEAF会員企業と協力して行う可能性を模索している、甲陽園大池の水質改善、外来種対策事業について理解を深めた。大池の自然環境の過去からの経緯を理解し、また、実際に現地を訪問し、観察した。
  ・甲陽園エココミュニティ会議
  甲陽園エココミュニティ会議に出席し、同会議がどのようなテーマで活動しているかを知った。大池の水質改善、外来種対策事業への提案が行われ、同会議がこれからどのように協力していくか、会議の様子を傍聴した。また、会議後、甲陽園小学校のビオトープなど自然観察施設を見学し、同小学校の取り組みを理解した。
- 6/14 ・西宮市生物多様性地域戦略策定協議会全体会 ・宮水学園（高齢者大学）環境コース第1回
- 6/20 EWCニュース発送
- 6/21 LEAF会員企業の活動紹介
- 6/28 ESD講義
- 6/30 田んぼ・畑の手入れ
- 7/5 ・ESD講義 ・体験教室支援打合せ
- 7/14 企業の環境学習支援「びんの一生」見学 学校給食試食・国際交流（西宮市深津小学校4年）
- 7/16 京都の伝統文化見学
- 7/17 ハウス食品㈱ 食と農と環境の体験教室支援
- 7/21 西宮市の廃棄物処理（清掃工場見学） 市内会員企業の取り組み見学 ㈱大栄 ㈱吉田製作所 マツダ㈱
- 7/26 春風エココミュニティ会議活動参加（仁川生きもの観察）
- 7/30 こども農業塾活動支援
- 8/3 ・環境省環境教育推進室訪問 ・ハウス食品㈱本社訪問（企業の食農教育支援事業について）
- 東京
- 8/4 ・外務省訪問（ESD事業について） ・JICA本部訪問（国際協力事業について）
- 8/16 大阪ガス姫路工場見学
- 8/18 関西電力大飯原子力発電所見学
- 8/20 西宮市貝類館「貝の解剖教室」参加
- 8/23 西宮市の防災計画について
- 8/24 ・産業廃棄物処理施設（西宮市鳴尾浜） ・企業の環境対策（キリンビール神戸工場） ・兵庫県立人と自然の博物館
- 8/25 西宮市の福祉施策（西宮市総合福祉センター）
- 9/10 9/11 こども農業塾活動支援
- 9/20 神戸女学院大学 修了式

★★会員募集★★

当協会の活動は、個人や団体会員の方々のご支援によって支えられています。子ども達の環境活動を今後も支えていくために、随時会員を募集しています。

会員になっていただいた方には、環境研修会へのご案内や、情報誌等の資料をお送りします。

環境活動支援情報誌　りぃふ　VOL.36　2011年 Summer

編集・発行　NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）
〒662-0832　兵庫県西宮市甲風園1丁目8-1
ゆとり生活館アミ1階
TEL　0798-69-1185
FAX　0798-69-1186
URL　http://leaf.or.jp
E-MAIL kodomo@leaf.or.jp

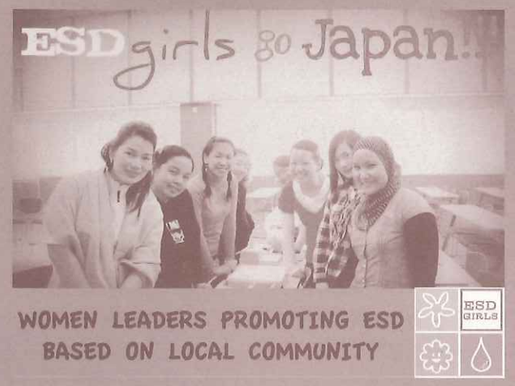
環境活動支援情報誌　VOL.36

りぃふ

エココミュニティ会議を見学

甲山農地で田植え

EWC環境パネル展



小学校での環境学習授業

甲子園浜見学

テーマ：持続可能な地域づくり
― 西宮からの提案 ―

もくじ

「国連ESDの10年」を巡る国の動向 ・・・・・1
西宮市におけるESD推進事業の今後の展開 ・・・・・3
アジアの各地域からESDを推進する女性環境リーダーの育成 ・・・・・5
プログラム受講生による中間報告会 ・・・・・6
プログラム受講生のレポート ・・・・・7
モハメド・マヒディン、アイヌル・マージァナ（マレーシア）
ニウ、ペイペイ（中国）
バイバイ、カーラ・セリーナ・キスビン（フィリピン）
メリス、ジョアン・クリスティ・ミラ（フィリピン）
レガラド、アルマ・バーナデット・リガユ（フィリピン）
ボントー、キャサリン・カトリーナ（インドネシア）
グエン、ユン・ホァン（ベトナム）
トウロン・チー・ミン・アン（ベトナム）
プログラム受講生からLEAFへのメッセージ ・・・・・15

未来が変える。日本が変える。 チャレンジ25

2011　Summer
Learning and Ecological Activities Foundation for children

「国連ESDの10年」（2005-2014）を巡る国の動向

■持続可能な地域・社会づくりに向けて

今、市民ひとり一人の生活レベルから国内外の社会情勢まで様々な場面で「持続可能性」を揺るがす問題が噴出しています。環境と経済と社会の統合といった考え方を基本に社会のあり方を考え直そうという動きが日本社会でもようやく認知されるようになりました。また、これらを推進するための教育である「持続可能な開発のための教育（ESD）」*についても、2004年の国連決議を受け国内での普及が進められています。

そして、本年6月、日本政府は2005年からの「国連ESDの10年」の前半期を振り返り、2006年決定の実施計画を見直し、改訂版（改訂ポイントは次頁）を発表しました。この中で、東日本大震災にも触れ、持続可能な社会にとっての自然災害や原子力発電との向き合い方についても検討課題としています。

巨大地震、津波、原子力発電所事故、放射能汚染、がれきなどの処理、エネルギー源と供給体制、食の安全、地場産業、経済構造、大都市と周辺都市との関係、政治と行政の役割、リスクマネジメント、経験知の伝承と地域文化、国際社会での責任など、これまでは個々の問題として論じられたことが、この大震災によって全てをつなげて考え、具体的な行動へと結び付けなければ状況となっています。

当協会関係者の多くは、1995年の阪神淡路大震災を経験しそれぞれに色々な思いを持ってこれまでを過ごしてきました。今回の東日本大震災で犠牲となられた多くの方々やご遺族の方々、現在なおも避難されている方々、復旧・復興に向けて尽力されている地域の関係者の方々、ボランティアとして現地支援をされている方々、原子力発電所事故の復旧に日夜取り組まれている現場の方々などの思いを、次の時代・世代への「智恵と力」に変えていくことについて、微力ながら当協会でも取り組ませていただきたいと考えています。

持続可能な地域・社会とは何か、持続可能性教育とは何か、改めてこれらの投げかけについて問い直していきます。

＊これまで、ESDは「持続可能な開発のための教育」と訳されていましたが、日本ユネスコ国内委員会では、国内への普及促進を目指して、より簡単に、「持続発展教育」という名前を使っています。

●「ESD」の基本的考え方　「ESD国内実施計画」より

経緯

ESDは、教育及び持続可能な開発に関するそれぞれの世界的な取組に由来しています。教育については、1948年の世界人権宣言において「すべて人は、教育を受ける権利を有する」とされ、1990年の「万人のための教育世界宣言」以降、初等教育の普遍化、教育の場における男女格差の是正、識字率の改善などを目標とした「万人のための教育」（Education for All(ＥＦＡ)）の実現に向け世界的に取り組まれています。

一方、持続可能な開発については、1987年、ブルントラント・ノルウェー首相（当時）を委員長とする「環境と開発に関する世界委員会」が公表した報告書「われら共有の未来（Our Common Future）」の中心的な考え方として、「将来の世代のニーズを満たしつつ、現在の世代のニーズも満足させるような開発」という「持続可能な開発」の概念が取り上げられました。その後、1992年に開催された国連環境開発会議（地球サミット）においては、持続可能な開発についての国際的な取組に関する行動計画である「アジェンダ21」が採択され、この「アジェンダ21」の第36章「教育、人々の認識、訓練の推進」の中で持続可能な開発のための教育の重要性とその取組の指針が盛り込まれました。

このような教育と持続可能な開発に関する取組が世界的に行われる中で、ESDの概念についての議論が深められ、国連持続可能な開発委員会において国連教育科学文化機関（以下「ユネスコ」）が中心となり、持続可能な開発のための教育のあり方について検討が進められました。

2002年に開催された持続可能な開発に関する世界首脳会議（ヨハネスブルグ・サミット）の実施計画（以下「持続可能な開発に関する世界首脳会議実施計画」）を交渉する過程で、我が国は、国内のNPOから提言を受け、「持続可能な開発のための教育の10年」（以下「ESDの10年」）を提案し、各国政府や国際機関の賛同を得て持続可能な開発に関する世界首脳会議実施計画に盛り込まれることとなりました。このことを踏まえ、我が国より、2002年の第57回国連総会に、2005年からの10年間をESDの10年とする旨の決議案を提出し、満場一致で採択されました。我が国は、2003年の第58回国連総会、2004年の第59回国連総会においてもESDの10年を推進するための決議案を提出し、それぞれ採択されました。これらの国連決議に基づき、ESDの10年の推進機関として指名されたユネスコにより国際実施計画が策定され、2005年9月に承認されました。

2008年には我が国でESD国際フォーラムが開催されました。ESDの10年の中間年である2009年には、ドイツ（ボン）においてESD世界会議が開催され、「ボン宣言」が取りまとめられました。「ボン宣言」ではESDの意義、これまでの進捗状況に言及するとともに、政策レベル、実践レベルでの行動の呼びかけ、ユネスコへの要請について言及されました。2010年の国連総会では、ユネスコから前半5年間の取組報告がなされています。

2014年にはユネスコと我が国の共催により、我が国で「国連ESDの10年」最終年会合（以下、「最終年会合」）が開催されます。

我が国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画（ESD実施計画）
平成23年6月3日改訂「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議 より抜粋

「ESD国内実施計画」　2011年（平成23年）改訂

2005年から2014年を実施期間とする「国連持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」も、残すところ3年半となりました。日本におけるESD推進の取りまとめ機関となる関係省庁連絡会議では、これまでの取り組みを総括し、2006年（平成18年）3月30日に決定したESD実施計画を2011年（平成23年）6月3日付で改訂しました。

この改訂にあたって設置された民間人による円卓会議の座長には、当協会の小澤紀美子代表理事（東京学芸大学名誉教授として）が就任し、委員には小川事務局長も参加させていただきました。

円卓会議での意見やパブリックコメントなどを踏まえて、関係省庁連絡会議が改訂したポイントは以下の通りです。

前提として、国際的にも、国内的にもESD の重要性がますます高まっていることを指摘。
世界では、地球温暖化が進行、生物多様性は減少、水ストレスを受ける人口が増加。国内では、「格差社会」、「無縁社会」といった問題。人と人、人と自然のつながりを大切にする教育がより重要に。

1．前半5年の取組について追記
- 国際的取組の推進
- 学習指導要領に持続可能な社会の構築の観点が盛り込まれた
- 「社会的責任に関する円卓会議」、「『新しい公共』推進会議」が設立

2．ESDの普及促進をさらに加速させ、ESDの「見える化」「つながる化」を推進
「各地で多様なESD活動が展開されているが、知られていない。」「それぞれの活動がバラバラで“持続可能な社会”という共通の目標に向かっているという認識が薄い」といった反省を踏まえて、「見える化」、「つながる化」を進める

3．新しい学習指導要領に基づいた実践、ユネスコスクールの活用など、学校教育を活用してESDを推進
重点的取組事項を前半5年間の①普及啓発、②地域における実践、③高等教育機関における取組から、後半は①普及啓発、②教育機関における取組、③地域における実践へと改訂
- 2008年、2009年に公示された新しい学習指導要領には、持続可能な社会の構築の観点が盛り込まれた。新しい学習指導要領に基づき、教育現場でESDの考え方に沿った教育を前進させる
- ユネスコスクールをESDの推進拠点として位置づけ、その加盟校増加を促進するとともに、ユネスコスクール間のネットワークの強化、活動の充実を図る

4．新しい公共の概念との関係を明記
ESDでは、様々な主体が連携して持続可能な地域づくりを行うことを目標としている。
「社会的責任に関する円卓会議」や「新しい公共」推進会議が設けられるなど。現代社会の課題解決には、政府だけではなく多様な主体の行動がつながっていくこと、その担い手を育む教育を充実させることが必要との認識が広がってきている。

5．2014年の最終年の先も見据えたESDの更なる促進を図る
なお、2011年3月11日に発生した東日本大震災は、我が国におけるESDの実施のあり方にも大きな影響を及ぼす。大震災の経験を基にした教訓や復興についての考え方をESDの推進にどう生かしていくかについて、被災地の安定等を待って改めて議論し、それを踏まえて再度実施計画を改訂する。

持続発展教育（ESD）とは

ユネスコ・スクールのホームページより抜粋

持続発展教育(ESD:Education for Sustainable Development)は、私たちとその子孫たちが、この地球で生きていくことを困難にするような問題をについて考え、立ち向かい、解決するための学びです。

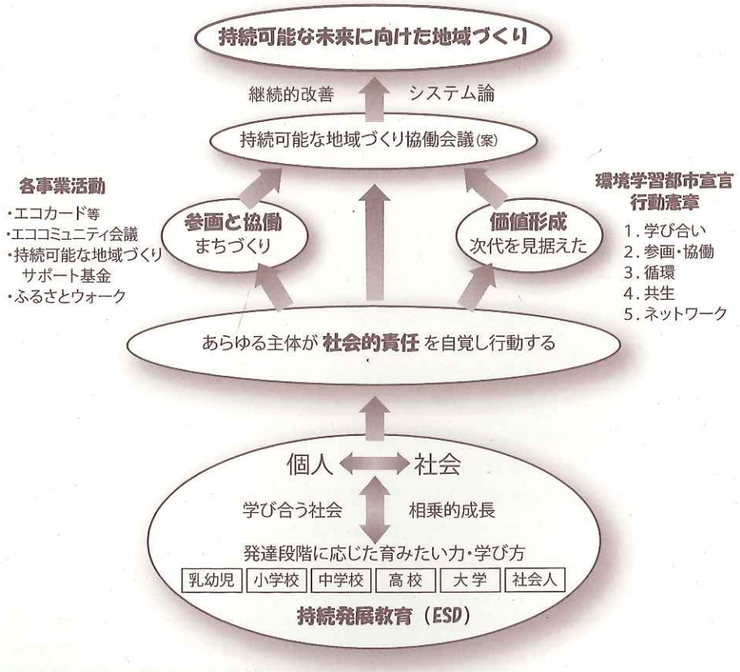
●将来にわたって、持続可能な社会を構築するために、私たちはどうすればよいのでしょうか。
まずは、問題意識を持つこと。そして、取り組むべき課題ついて知ること。その課題と自分とのつながりを考え、理解すること。その問題・課題解決のために人と意見を交わし、共にあるべき方向を確認し、行動することです。このように、考え、行動できる人材を育てる教育がESDなのです。政府はユネスコスクールをESDの推進拠点として位置づけています。

●ESDは、持続可能な開発の基盤となる価値観や行動の指針を広げるような教育です。
具体的なテーマとしては、水資源、ゴミ問題、雇用、人権、ジェンダー、平和と人間の安全保障、貧困削減、HIV/AIDS、移住の問題、気候変動、都市化などが例ですが、個別の問題としてではなく、いずれも、文化的な背景のなかでの環境、社会、経済の複合された問題として取り組むことが求められています。

●このように、ESDは環境、社会、経済という相互に複雑に関連している三つの領域に注目しながら進める、きわめてホーリスティック(全体論的)な課題なのです。さらに、これら三つの領域と文化との関連、また、精神・こころという人間の内面的な側面をどのように位置づけるのかは、ESD関連の国際会議などで指摘される課題となっています。しかし、ESDは決して特別な活動ではありません。環境教育や国際理解教育など、既に各校で取り組まれている活動は、ESDになりうるものです。

西宮市におけるESD推進事業の今後の展開

NPO法人こども環境活動支援協会事務局長
小川　雅由



■ESD推進事業
これまで（1998～2010）の取り組み

LEAFでは、1998年の協会発足当時から「持続可能性のための教育」（ＥＦＳ＝Education for Sustainability）を米国バーモント州のシェルーバーンファーム（現LEAF理事が運営する環境教育団体）とともに共同研究してきました。当時、日本社会では教育界に「総合的な学習の時間」を導入すべく試行的な取り組みが進められていました。

「総合的な学習の時間」では、子どもたちの「生きる力」を育むために教科や課題学習の壁を超えた横断的な取り組みを目指すとともに、自然体験・生活体験・社会体験などの基礎体験を盛り込み、探究的な授業展開の視点を重視していました。

当時のバーモント州プロジェクトメンバーが発表した事例の中で、EFSについて、「EFSは経済、環境、及び社会の相互関連性の理解を促す。EFSは、生徒が地域と地球の健全な未来を築くことが出来るように、この知識を探究と行動に結び付ける」と紹介し、これらをバーモント州の教育課程に盛り込むための検討を行い、改訂されました。

一方、西宮市においてもエコカードシステムや学校への各種授業支援においてもEFSの考え方を盛り込みながら地域・学校・家庭を結ぶ活動を行ってきており、バーモント州と西宮市の双方で連携を取りながらEFSを念頭に入れた取り組みを進めていました。

これら一連の交流の成果は、2003年に西宮市の環境学習都市宣言を記念したシンポジウムで西宮市とバーモント州バーリントン市の間で交わされた「環境学習と持続可能な発展への取り組みを通じた持続可能なまちづくりのための相互貢献に関する共同声明」として両市において確認されました。

日本政府が国連に持続可能な発展のための教育（ESD）を提唱したのもこの時期で、2005年には「国連ESDの10年」がスタートしました。2006年3月にESD国内実施計画が策定され、環境省は「国連ESDの10年促進事業」を実施し、全国からモデル地域を募集し、西宮市もその中の一つとして選定されました。これを機に、西宮市や教育委員会、商工会議所、教職員組合、生活協同組合、NPO（当協会など）が集まり、西宮市ESD推進協議会を発足させ5年間にわたって活動を行ってきました。

■今後の取り組みの方向性
持続可能な地域づくり協働会議（案）の設立に向けて

EFSやESDにおいて重視されている持続可能な社会に向けて求められる「育みたい力」は「総合的な学習の時間」の「生きる力」とほとんど同様の内容だと言えます。ESDと「総合的な学習の時間」の相違点を挙げるならば、ESDが「持続可能な社会の構築」という将来の社会像を明確に示している点です。ESDが「個人の生き方」と「目指すべき社会像」を包含した形で提唱されたため、ESDを掲げる多種多様な活動が誕生しています。このことから、ESDとはどのような活動を行う取り組みなのかということが少し混乱してきているのではないかと思われます。

我が国のESD実施計画ではその目標について次のように記されています。

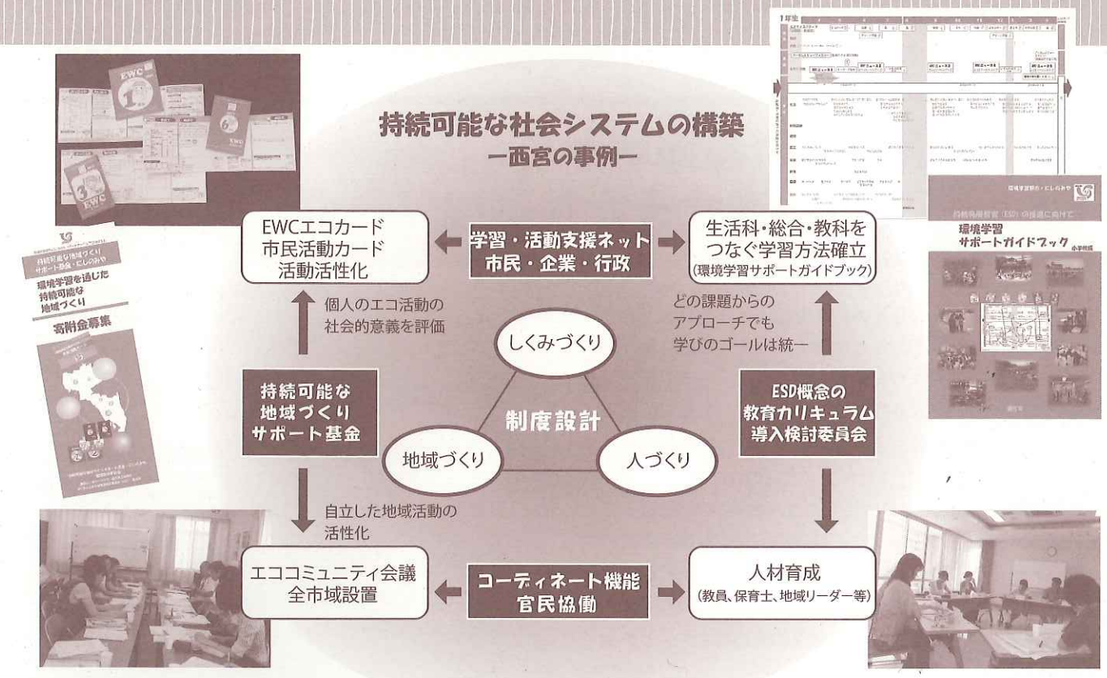
「すべての人が質の高い教育の恩恵を享受し、また、持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれ、環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすことであり、その結果として持続可能な社会への変革を実現することです」

この内容を整理してみると、「教育的視点」「文明的視点（価値観の転換）」「まちづくりの視点」といったような取り組みの方向性を示唆しており、これらをバラバラに進めるのではなく、統合的、包括的にバランスよく同時的に進めていくことを求めていると思われます。

ESD国内実施計画の中の活動推進にあたって留意すべき視点として掲げられている事項を一つでも行っていれば、ESDの活動であるとしてしまうのは少し無理があるのではないかと思っています。ESDの基本は、何といっても「Education＝教育」です。西宮市では、当初より「振り返ればESD」ということを基本に掲げてきました。これは、ESDを目指すというよりも、ESDを追求し続けることにこそ、その本質があると考えたからです。

こうしたことから、西宮市ESD推進協議会で今後の活動の方向性（まちづくりの視点）について協議を行ってきました。その結果、ESD推進協議会という名称では参集していただく団体の性格や活動の内容にどうしても制限が加わってしまわざるをえないことから、もう少し間口を広げた枠組みで活動を進めていこうということになりました。

今後は、「持続可能な地域づくり協働会議（案）」を多様な主体の連携で発足させ、「教育的視点」「文明的視点（価値観の転換）」「まちづくりの視点」といったような取り組みの方向性を明確にした上で、中長期的な視野に立って具体的な活動方針を策定していきたく考えています。



■社会システムとして機能させるために
「活動」の役割を明確にする

各地域で持続可能な社会を目指した取り組みを進めていくためには、活動の全体像を常に俯瞰的に検証する必要があります。

西宮市で持続可能な社会システムの構築という観点から活動全体を整理したものがp.4の図です。「しくみづくり」「地域づくり」「人づくり」といった視点から活動全体を整理するとともに、「それぞれの役割を持った活動」（□囲み）と「活動と活動をつなぐためのしくみを持った活動」（■囲み）を体系的に整理しておくことで全体のつながりや相互関係が明確になってきます。

例えば、小学生や中学生以上の市民を対象に行っている「EWCエコカード」「持続可能な地域づくり市民活動カード」といったひとり一人の市民の「活動」（□囲み）を、地域ベースで行われているエココミュニティ会議への活動資金提供という形でつなぐための「持続可能な地域づくりサポート基金」の「活動」（■囲み）が新たに出来たことで、活動間のつながりが見えるようになります。この事例は、ESDにおける「まちづくりの視点」からアプローチしている内容と言えます。

また、平成23年度から市内小学校の全教員に配布された「環境学習サポートガイド」では学校教育の中における教科や課題学習を横断化させるために1年生から6年生までの各学年の教科書に記載された環境や持続可能性に関連する単元を抜き出し、先生方が年間カリキュラムを作成する際の手助けが出来る内容のものです。この中には、EWCエコカードや地域活動とのつながりも考えられる内容も入っています。しかし、このサポートガイドを単に配布するだけではその趣旨が伝わらない可能性もあるため、年度当初に開催される環境教育担当教員説明会で教育委員会と市環境学習推進グループ、当協会が連携して年間事業計画などについて統一的に紹介するなど、恒常的なネットワーク活動を行っています。

本年度から教育委員会から各小学校に依頼される環境教育事業計画は名称を変更し、「ESD事業計画」として各学校でその趣旨を踏まえて事業計画案が作成されることになりました。さらには、このサポートガイドの作成にあたって、教育委員会から当協会が依頼を受けて実施している新任教員研修などの人材育成の機会を通じて、新任教員の意見も組み込んだ形で原案を作り、将来に向けて普及を図っていくというものです。

当協会では、昨年度からESDで重視されている「育みたい力」を教育課程の中にどのように取り入れていくことが出来るかを検討する委員会を開催し、平成23年度からは、子育て総合センター（保育士と幼稚園教員（合計8名）で共同研究チーム）と当協会で、0歳から就学前までの乳幼児を対象にESDの「育みたい力」をどのように整理し、保育内容に反映していくかを検討しています。これらの活動は、「教育的視点」に立ったつながりを重視した取り組みと言えます。

「つながり」は物事を整理しなければ、「見える化」できません。個々の「活動」には、当然のことながら目的があり、その役割があります。それぞれの目的や役割を大きな目標に向けて適正に配置していかなければ「システム」として社会の中で機能させることもできません。また、この「つながり」を関係者が「自覚」して関わることができるかどうかも重要なポイントです。

いくら多様な活動を行っていても、それらを羅列的に見ているだけでは、持続可能な社会システムとしては機能しないのではないかと思われます。

これらの「活動」を見ながら、点から線、線から面、面から立体へとイメージを膨らませることができるような構造になって、初めて持続可能な社会システムとして「つながる化」の基本が整っていると言えます。

● ● ● ■ ● ● ●

西宮市の環境学習都市宣言は、まさにESDの「文明的視点（価値観の転換）」に立った考え方を整理したものであり、持続可能な社会づくりに向けた方向性を示唆したものと言えます。

本号のp.5以降では、「文明的視点（価値観の転換）」に立った活動事例として神戸女学院大学大学院と連携した、アジア各国の「地域からESDを推進する女性環境リーダーの育成」に関するプログラムで当協会が担当したインターンシップについてご紹介します。

この活動は、西宮市環境学習都市宣言の行動憲章（「学び合い」「参画・協働」「循環」「共生」「ネットワーク」）の中の「ネットワーク」に関連する活動です。

アジアの各地域から ESDを推進する女性環境リーダーの育成

ESD実施計画の中には、国際協力の推進に関する事項も含まれており、「各国の貧困を始めとした諸課題が解決され、平和で持続的な国際社会が構築されることは、我が国の安全の確保や発展にも資するものです。…ESDの普及促進を始めとして、教育分野の支援を強化し、先進国の一員として積極的な国際協力を推進します。」と位置付けられています。

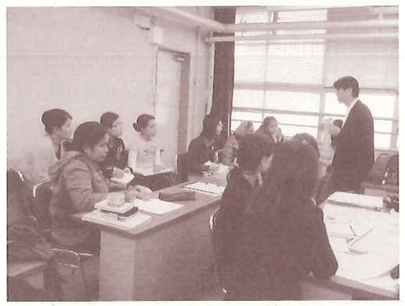
また、開発途上国における人づくり等への支援策として、「ESDに資するプロジェクトの実施、専門家等の派遣、国内外の研修等を通じ、開発途上国において持続可能な開発を担う人材の育成に貢献します。また、国内において、開発途上国への支援を担う人材育成に努めます。」といった施策の方向性が定められています。

神戸女学院大学大学院が文部科学省の科学技術振興調整費の助成を受けて、アジア5ヵ国（中国、ベトナム、マレーシア、フィリピン、インドネシア）からの留学生(8名)や日本人学生を対象に実施している「地域からESDを推進する女性環境リーダー育成プログラム」は、まさにこうした日本政府の考え方を具体化したものだと言えます。

当協会は、この１年間を通じたプログラムの中のアジア留学生のインターンシップの受け入れ先として、10単位分の授業構成を企画運営しています。

日本政府が国連に提唱したESDですが、我が国での普及はまだまだ十分とはいえない状況です。このプログラムを実施する中で、当協会が彼女たちに西宮市における実践からESDについて学んでもらっていますが、西宮市民や当協会スタッフも彼女たちから多くのことを学び、また国際交流の機会も与えてもらいました。このESDプログラムが終わっても、お互いが対等な立場で学び合い、持続可能な社会構築に向けて行動していくアジアネットワークの一員としてつながりを継続していけることを願っています。

以下、昨年10月からのカリキュラム構成の概要や活動内容、インターン生ひとり一人のコメントをご紹介します。



■ プログラム概要

神戸女学院大学大学院人間科学研究科は文部科学省科学技術振興調整費（2011年度より科学技術戦略推進費）「戦略的環境リーダー育成拠点形成」事業による支援を受けて、平成21年度から5年間の予定で「地域からESDを推進する女性環境リーダー」という教育プログラムを実施しています。このプログラムの特色はアジア・アフリカ地域の大学院に学ぶ女子学生を研修生として受け入れ、1年間の研修を行い、帰国後にそれぞれの地域で活躍できる女性環境リーダーを育成することです。

プログラムは神戸女学院大学の教員を中心にしたリレー式の英語による講義、インターネットビデオ会議システムを利用したアジア諸国の教員によるライブ講義、フィールドワーク、そしてNPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）と連携したインターンシップの４つの柱で構成されています。

■ インターンシップ　カリキュラム

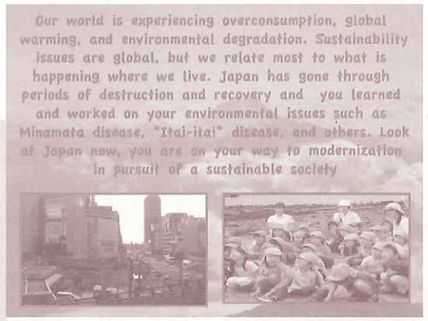
インターンシップは前半期（10月～3月）、後半期（4月～7月）、夏季期間（8月～9月）の3部に分かれており、発展的にESDを学べるように構成しています。

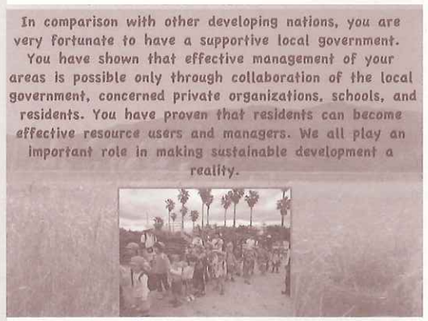
【前半期授業のテーマ】
(1)ESDの基本概念を理解する
(2)フィールドとなる西宮市、LEAFの活動を理解する
　①西宮市におけるフィールド見学や活動のしくみを学習する
　②LEAFの活動に参加し、NPOの役割を理解する

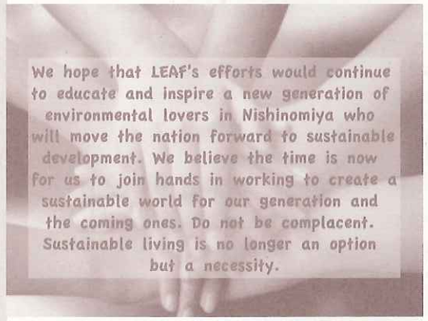
【後半期のテーマ】
(1)ESDの概念を応用した活動や事業実践の方法を理解する
(2)フィールドとなる西宮市、LEAFの活動を理解する
　①持続発展教育（ESD）の概念などを組み込んだ事業への理解を深める
　②西宮市の環境学習事業（地球ウォッチングクラブ：EWC）や地域実践に主体的に参加する
　③LEAFの活動に主体的に参加し、スタッフとして事業実践を行う

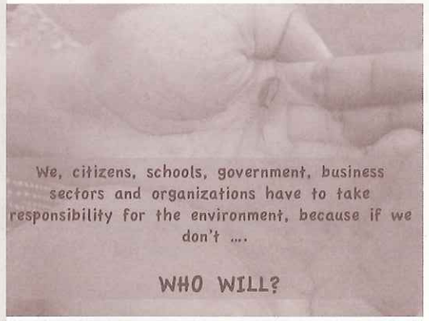
【夏季のテーマ】
(1)西宮市やLEAFの活動にスタッフ補助として参加し、実践的にESDの概念を学ぶ
(2)政府レベルや企業の取り組みを理解する

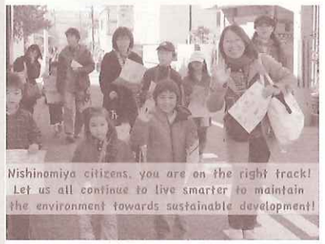
プログラム受講生による中間報告会











6月10日、神戸女学院大学講堂において、インターンシップ研修生による中間報告会が開かれ、昨年10月からの活動が映像を使って報告されました。

このプログラムの概要、研修生の自己紹介、インターンシップで学んだ内容、最後に西宮へのメッセージが発表されました。

神戸女学院大学講堂にて

私たちから西宮へのメッセージ

■いま私たちが住む世界では、過剰な消費、地球温暖化、環境破壊が進んでいます。持続可能性は世界的な問題ですが、私たちは、私たちが暮らす地域で今起きていることに主眼を置いています。日本は破壊と復興を経験し、水俣病やイタイイタイ病などの公害問題を経験し、解決に取り組んできました。現在の日本を見て下さい。日本は持続可能な社会を目指しながら、さらなる近代化へと進んでいます。

■他の途上国と比べて、日本には協力的な地方自治体があり、とても幸運だと思います。効率的なまちづくりは、地方行政、問題意識を共有する民間の組織、学校、住民らの協力があってはじめて成り立つということを知りました。住民が資源の効果的な使用者であり管理者となりえることを教えてくれました。私たちは皆、持続可能な開発を実現するための重要な役割を担っているのです。

■LEAFの取り組みが、西宮において環境を愛する新しい世代を教育し、動機付けし続け、彼らがやがて持続可能な開発に向けて国を動かす存在となっていくことを願います。いま、現在を生きる人々、これから生まれくる人々のために、手を取り合って持続可能な世界に向けて取り組む時が来ているのではないでしょうか。悠長に構えている場合ではありません。持続可能な生活は、もはや選択肢の一つでなく、必要なものです。

■私たち市民や学校、行政、企業が環境について、責任を持たなければなりません。なぜなら、もし私たちが責任を持たなければ、一体だれが持つのでしょう？

■西宮市民のみなさん、みなさんは正しい方向に向いています！

私たち皆が、これからも賢く暮らして、持続可能な開発に向けて環境を維持していきましょう！

ありがとうございました
これからもがんばろう！

EWC20周年記念シンポジウム打合せ

教員研修：地域学習でまちを歩く

EWC子どもたちへの認定グッズ作成

農地の田んぼ排水整備作業

子どもたちと田植え（こども農業塾）

幼稚園児と海の生きもの発見プログラム

MALAYSIA

モハメド・マヒディン、アイヌル・マージァナ

マレーシアプトラ大学

専攻：景観学
研究テーマ：子どもと自然環境
参加理由：日本において地域でどのようにESDが行われているのか、特に子どもに対しての取組みについて知り、経験したかったから。

私は、アース・ウォッチング・クラブ（EWC）のエコカード事業に感心し、関心を持ちました。子どもや大人が市内でエコ活動をする機会を与え、応援するよいプログラムだと思います。西宮市内の市民、行政、企業を協力するようつなげるような関係を築くことが大切です。機会があれば、私はエコカードの考え方を自国で、大人の考え方を変えるのはとても難しいと思うので、少なくとも子ども対象に実施してみたいと思います。しかし、実際に事業を実施するには、多くの費用を要すことやエコカードの考え方が国や世界に有益であると人々に信頼されなくてはならないことなど容易ではないと思います。

私がもう一つ関心を持ったのは、環境教育のための新任教員研修です。日本の教育制度と比べると、マレーシアの教育制度は多少固定化しており、教科書に沿ったものだと思います。日本の教育制度はより実践的で体験を重視しており、子どもの学びのためにはその方がよいと思います。教員研修の趣旨は、新任の教員に西宮市、特に地元の歴史や自然などについての知識と理解を与えることで、子どもたちが自分の育った街や住む街を愛するためには、まず街の背景や場所そのものについて知ることが大切です。自分の周りの環境を知り、理解し、どんな問題があるか認識し、よりよい解決策が見出されることで、ESDの考え方は実現すると思います。よりよい解決のための技能は、よりよい社会のために、早い段階から育まれるべきものです。私の学生時代、私たちの住む街について教えるために先生が生徒を街に連れ出すことは一度もありませんでした。対照的に、日本では、幼稚園児や小学生が街を歩いているのを何度も見かけました。場所や住む地域について知るという考え方は、子どもたちに持続可能な環境を目指すように教育する上でとてもよいと思います。

また、日本の教育制度では、食育がカリキュラムの1つだと知りました。これは、子どもが食べ物の最初から最後までのサイクルをしることができ、とても興味深いことだと思います。食育を通じて、子どもは農業やゴミといった多くのことを学ぶことができます。マレーシアでも食育が行われればよいのにと思います。食べ物を無駄にすることを防ぎ、食品のリサイクルを進める上で有効だと思います。

エココミュニティ会議は、地域に住む環境に関係のある人などによって運営されていることを知りました。エココミュニティ会議は学校の生徒を通じて活動を広報し、各家庭に周知することができます。しかし、エココミュニティ会議のメンバーが環境志向の考え方を持っていても、それを社会全体に反映させることは簡単ではありません。だから、子どもに環境問題を教育する上で、まだまだ学校が重要な役割を担っていると思います。このほか、それぞれのエココミュニティ会議が取り組んでいるテーマや問題は、主に環境問題に関するものですが、環境問題だけに焦点を当てるのでなく、ESDに関連づけたテーマに取り組むべきではないでしょうか。

このほかに関心をもった活動は、ふるさとウォークや農地での収穫祭といった地域住民との活動です。私は農作業についての多くの基礎的な知識や技能を学びました。また、このような活動を通して、日本人がどのように行動するか観察する機会を得ました。日本の文化は観察、比較すると、とても興味深い面があります。世の中がより近代化、複雑化し、生活についての基本的なことを学ぶ機会がほとんどありません。したがって、このような活動は、子どもが実際の世の中を直視し、技術だけに頼らない生き方をするための準備として必要です。そうすれば、彼らは将来また災害が起きた時、少なくとも生き延び、生き続けることができると思います。途上国はでは、技術は日本よりもずっと遅れており、マレーシアでこのような活動はめったに行われません。経済の安定を図ること、経済発展が主目的であり、環境問題は優先順位が低いので、このような活動はほとんど行われないのです。

私がインターンシップから間接的に学んだ重要なことは、環境に関する組織をどのように管理・運営するかということです。また、個々のイベントがどのように計画、実施されるかを学びました。組織をスムーズに運営していくためのより良い資金を得るために、地域の企業や市民、市役所とよい関係を築き、継続していくことが肝要です。組織のメンバーは、多くのことをゼロから始め、環境を守るために情熱をもって取り組んでいることが分かります。私は、このインターンシップは、環境をベースにした組織が、よりよい環境を実現し、将来の世代のために持続可能な社会を目指すために、どのように運営され、社会や地域の中でどのような役割を果たしているかを知ることのできる、とてもよいプログラムだと心から思います。

国際交流協デー：西宮市長と

2010

- 10/1 来日
- 10/14 ESD講義① 年間学習計画について
- 10/16 兵庫県の水産業の現状（兵庫県漁連）
  兵庫県漁業協同組合連合会を訪問し、「このままでは地物の水産物が食べられない！問題山積の漁業と立ち向かう漁業者」をテーマに水産業が抱える課題を学ぶとともに競り市の現場を視察した。
- 10/21 ・ESD講義 ②「日本の行政制度とNPOの現状」
  留学生からインターンシップで学びたいことなどについて意見聴取を行った。また、インターンシップ期間中には様々な行政機関から学ぶことも出てくることから日本の行政制度や地方自治の概要について紹介し、自国との違いや類似点などについて理解を深めた。
  ・キックオフシンポジウム
- 10/26 ふるさとウォーク準備会議
  留学生の実践的な活動の一つとして西宮市ESD推進協議会が主催する「ふるさとウォーク2010」の関係者説明会に出席してもらい、事業の趣旨や活動内容、役割分担について紹介するとともに、参加関係団体との交流を行った。
- 10/28 小学校での自然体験活動（平木小学校3年）
  当協会が西宮市立平木小学校3年生を対象に実施した環境体験事業に参加した。当日は雨天であったため、西宮市立甲山自然環境センター研修室で甲山の自然やエコハウスなどについてレクチャーを受けるとともに、子どもたちとの交流を行った。

CHINA

ニウ、ペイペイ

華南師範大学

専攻：環境工学
研究テーマ：科学教育
参加理由：地域でどのようにESDを推進するか日本で学びたいと思ったから。

真似から始める

西宮市甲子園浜自然環境センターにて冬鳥の観察

私がインターンシップから何を学んだか？第1に、ESDの講義です。講義では、西宮やLEAFの歴史、日本でのESDおよび環境教育などについて学びました。第2に西宮市民やボランティアとの活動です。第3に、LEAF事務所でのインターンシップです。そこで、NPOが市民や学校に対してどのような仕事をしているか、学びました。半年間のインターンシップを行って感じたことを、以下に記します。

まず、仕事に臨む態度です。LEAFの職員は私たちにとても親切です。国、文化、言葉が異なるにもかかわらず、私たちは一つの大家族のように感じます。私も中国で仕事に就いたら、一緒に働く人たちには親切にしたいと思います。更に感じたのは、良心、我慢、細かい点に気を配る特質です。私は日本に来る前に、いくつかの活動に参加していました。しかしその時、小さな失敗に直面しました。例えば、生徒が列に並ばない、いい結果にならなかったなどです。これは細かい点に目が行っていないからです。私は活動の準備をする際に、細かい点まで詰め、良心と我慢をもって臨みたいと思います。他人の過ちには、笑顔を向けましょう。私たちは度々間違いますが、LEAFの職員は私たちに優しく、「大丈夫だ」と言います。

2つ目に、活動の種類についてです。中国に帰ったら、ESD関連の仕事に就きたいと思います。西宮での市民や生徒たちを対象にした数々の活動は、大変参考になります。各活動の紹介をしたいと思います。教師に活動を紹介し、学校で共にESDの推進をすることができます。一言でいえば、真似から始めます。

3つ目に、各活動の運営について学んだことを述べたいと思います。まず、学校教師対象の西宮の歴史を学ぶプログラムについて。誰でも自分の国や街を愛しています。それは、そこに住んでおり、そこのことをよく知っているからです。しかし、私たちが知っていることの多くは、現在のことです。その土地の過去や現在、未来といった全てを知ることにより、親しみがわき、より愛しくなります。私はこれから広州市の歴史を知り、それを私の生徒たちに伝えたいと思います。

第2に、私たちは環境パネル展の参加者への感謝状を作成する作業をしました。感謝状には展示作品の写真が載っていました。これは素敵な終わり方だと思います。私たちはたいてい、イベントそのものを楽しみ、その後には何もしません。ですが、今回、参加者に手紙や本、お知らせといった情報を送ったらいいのだと知りました。

第3に、エコカードについて。エコカードは長い歴史があり、うまく機能しています。そのことをESDの講義や、子どもや学校へ渡すプレゼント（注：20個バッジや賞状など）を準備する仕事をして、知りました。中国でも、エコカード活動を始めています。ですから、私がここで学んだ細かい点について、国に戻ってから、皆と共有したいと思います。より多くの街でこのような活動がされればと思います。

第4に、ESDを推進する会合について。教育関係の部署、大学教授、小中学校の教師、企業、行政、ESDを学ぶ学生が集い、会合を持ちました。それぞれの専門分野が異なるため、私たちが目指した目標は幅の広いものでした。素晴らしかったのは、小中学校だけでなく、幼稚園や保育所の教員が、この目標設定の会合に参加したことです。中国でも、ESDプロジェクトがあります。全体の目標は、教育の専門家が、教育の標準や生徒へのESD理解度調査に応じて、設定します。この方法の長所は目標が体系化されることと、隙間部分も目標設定できることです。ですが、そこでは生徒に近い存在である教師の役割が無視されています。教師が参加すれば、教師の仕事への情熱が改善するのではないでしょうか。この会合の後、私たちは、幼稚園、小学校、高校、大学、それぞれに対してどのような目標設定をすればいいか、話し合いました。この中で、私はもっと中国の生徒のことを知らなければと思いました。そうすれば、どうすればいいか分かります。また、政府の発行物など、ESDに関する情報を集めたいと考えています。そして、日本と中国の比較をし、広州でESDを推進していくために何をしなければならないか考えたいと思います。日本の子どもや市民の人たちともっと話をし、親しくなり、彼らのESDに対する考え方、食育、環境教育、防災教育といった、生徒を対象にしたESDを知りたいと思います。

- 11/2 ″ふるさとウォーク準備 チェックポイント問題作成″
- 11/6 ・高等学校での環境学習（武庫川女子大学付属高等学校）
  2年生を対象に行っている総合的な学習の時間「明るい未来のために」の授業に参加。「自分と家族の自活力チェック」「10年後の暮らしや社会への不安」について高校生とともに考え、意見交換を行った。
  ・国際理解講座「日本と世界の環境」大洋州諸島の環境問題から暮らしを考える（西宮市国際交流協会講座）
- 11/9 ESD講義③「西宮市の環境活動（1）」
  西宮市における環境学習を通じた持続可能なまちづくりの方向性や活動内容について学んだ。特に、2003年の「環境学習都市宣言」の考え方やエコカードシステムなど、地域社会全体を視野に入れた仕組みづくりの重要性について理解を深めた。
- 11/11 小学校での環境学習「お店たんけん」（高木小学校3年）
  西宮市内小学校の体験的環境学習に参加。店舗内における環境保全商品さがしやリサイクルボックスなどの状況、店舗のバックヤードでの環境への取り組みなどについて学習する様子を見学した。
- 11/16 新任教員研修見学「地域学習・環境教育」
  西宮市総合教育センターが主催する新任教員研修において当協会が講師を行っている「地域学習」「環境教育」の研修に体験参加した。地域学習では、実際に地域を歩き、まちの歴史や自然、文化などの地域の学習資源を教員が自ら見出し、まとめるプロセスを見学した。
- 11/23 甲山農業塾収穫祭
- 11/25 ESD講義④「西宮市の環境活動（2）」
  西宮市における環境まちづくりの重要な施策として実施されているエココミュニティ会議の設置目的や各地域における活動内容について学んだ。
- 11/27 エココミュイティ会議活動「おはぎ作り」
  春風エココミュニティ会議が主催する地域の子どもたちを対象としたイベントに参加し、地域住民が主体となって行う活動について学んだ。
- 11/30 ふるさとウォーク準備現場視察

Carla Selina Quisumbing Baybay

PHILIPPINES

バイバイ、カーラ・セリーナ・キスビン

ミリアム大学

専攻：環境マネジメント
研究テーマ：文化人類学、文化生態学、文化遺産
参加理由：ESDについての経験と理解を深めるため。特に日本の地域社会でどのようにESDが実践されているか知るため。

環境学習都市である西宮市は、地域住民の関与や住民の環境意識を高めてきました。西宮市やLEAFの努力はまさに称賛すべきものであり、この５ヵ月の間、インターン生は多くの見識と学びを得ました。西宮市は文化遺産や歴史を大切にし、保存しています。市の歴史、信条、慣習を保存することは、西宮市としてのアイデンティティを強めるものであり、市民によって評価されています。

さらに、文化は、人々の過去、現在、将来どうあるべきかを映し出します。文化は生活の仕方ですが、環境と深く関わっています。地域と切り離すことができません。文化はその土地に意識を向けること、また愛着を持つことであり、環境との関係を築くことです。ですから、高い環境意識と環境への関与は、地元住民がいかに環境を重視しているかに深く関わっています。

西宮市の環境や環境教育に対する深い関与は、過去を学び尊ぶこと、自然との共生への努力から始まっています。過去と現在が未来を形作る。同様に、過去や現在における環境との関係性が未来を形作ります。西宮市の環境教育事業は、西宮市の過去や現在の経験や、多くの市民に共有されている環境への意識と誠実さによって形作られています。

そこで課題となるのは、西宮市のESD事業から得た知恵を、自国でどのように適用できるか、ということです。一番の課題は、日本とフィリピンの社会、政治、経済、文化の相違でしょう。開発途上国の優先順位は自国の社会経済状況を改善することです。フィリピンでは、経済成長が、健康、教育、住宅、福祉の問題よりも優先されます。これは、政府が外国投資家を呼び込むために数多くの国際協定を結んでいることから明らかです。例えば、1995年に制定された鉱業法は、外資企業による採掘活動の増加を後押ししてきました。これにより、広範囲の森林、山林破壊、水源の汚染が起こり、生物や人間が住む場所を追いやられることになりました。

経済的利益のために生活環境の破壊を優先する政策以外にも、政治の世界の腐敗も、地域住民が心から真剣な変化を求めることを困難にしています。政治家が、地域住民が必要としている変化に注意を払わず、名誉や金を得ることに腐心していたら、変化をもたらすことは不可能です。増大するゴミ処理問題については、全ての地方自治体で効果的な地域ベースのごみ処理計画を立てていないため、環境的廃棄物処理を定めた法律では解決していません。予算配分、業務分担、住民の参加は、計画の実施を遅らせている、或いは全ての実施を不可能にしている関連事項のごく一部です。

貧富の差が大きくなるにつれ、地域は、相反する価値を持つ人たちで構成されます。例えば、日々の生存が何よりも優先されるかどうかで大きく異なります。従って、地域への関与、法や政策への順守、そのほか福祉の問題といった事は、優先順位が最も低くなることがあります。都市部の貧困地区では、プロジェクトを行うとすれば、住民は見返り（たいていの場合、お金）を求めます。困窮している人に力や権限を与えず、お金をあげるだけ、という考え方は、その地区に住む人々に自分たちで現状を解決する力を与えず、他人に依存させる体質を作ることになってしまいます。貧困の軽減や基本的な社会サービスの提供は重要な懸案事項ですが、地域住民を教育し、権限を与え、参加させること、独創性をもたせること、自立させることは極めて重要なことです。

西宮市で実施されているESDを直接、見聞することで得た学びは、3つの基本的な、しかし実現するには努力が必要な考えに言い換えることができます。それは、既存の学校のカリキュラムでより積極的に環境教育が行われるよう推し進めること。企業の社会的責任の観点から企業をより巻き込むこと。そして、能力開発したり、環境や社会開発に関連した問題に取り組むようなプログラムを実施して、地域住民に能力と権限を与えることです。

ESDの実施は、究極的には、地元住民の利益にかなうものであるべきです。その土地の住民が、彼らが過去から受け継いだもの、固有の習慣を基準にして、環境活動やプログラムを推進、実施すべきです。開発途上国では、貧困の削減と生活の質向上は、環境保全と合わせて実現されるべき2大目標です。持続可能な発展は、国家の社会経済状況、政治問題が改善しなければ実現不可能です。ですから、社会経済、政治による開発事業は、環境と持続可能な発展と手を取り合ったものでなければいけません。最終的に、環境的に持続可能な地域社会に向けて手を携えて進むことは、人々が環境に対する意識を持ち、環境との関わり合いを強めることです。

小学3年生の環境学習「お店たんけん」

12/4 ふるさとウォーク
チェックポイント
スタッフとして担当

12/7 ・保育所での環境活動見学
（西宮市立高須東保育所）
・インターンシップ活動内容協議

12/9 小学校でのPTAと連携した環境学習
（上甲子園小学校）
本授業はPTAが主催する形で保護者も参加する活動であり、学校における教員と保護者、NPOとの事業連携の様子を学んだ。

12/11 国際理解講座「日本と世界の環境」においてレポート発表
「アジアの環境問題から暮らしを振り返る」
（西宮市国際交流協会）

12/13 EWCニュース発送作業

12/14 ESD講義⑤
「ESDの考え方(1)」

12/16 しめ縄づくり

12/18 「地域活性化論」学外実習
人間科学部環境・バイオサイエンス学科「地域活性化論」の学部生に対する学外実習に同行し、西宮市内の山・農地・海・町中の環境学習施設やフィールドの見学を行った。

12/21 ESD講義⑥「ESDの考え方(2)」
ESDを考える上で重要な課題となっている防災教育について、阪神淡路大震災での経験をもとに西宮市で考案された「セイフティ＆エコガイド事業」の考え方を紹介し、環境教育とのつながりも含めて学習した。

12/24 EWC
エコメッセージ活動
感謝状楯づくり

PHILIPPINES

メリス、ジョアン・クリスティ・ミラ

ミリアム大学

専攻：環境マネジメント
研究テーマ：環境教育、環境正義、環境ガバナンス
参加理由：インターンシップ、講義、フィールドワークを通じて、学問的知識が広げられると思ったため。異文化理解の機会でもあると思った。

NPOのLEAFのインターンシップ・プログラムでは、ESDの重要な3つの構成要素について、インターンとして参加、見学し、手伝いました。その３つとは、生物多様性の保持、環境教育、地域と行政の参加と支援です。

生物多様性の保持は、自然環境保全の重要性を地域住民に教育する、ESDの重要な部分です。自然が年々減少していく中、現存する自然環境を保全していくことは持続可能な発展を目指す上で大変重要な部分を占めます。西宮市は、山や海に囲まれた市ですから、守るべき自然が多くあります。西宮市の行政が、日本でのESDの中心であると表明することは、環境保護と保全において画期的なことです。

生物多様性の保持は、農業に関する仕事や活動を含みます。インターンとして、私たちは遊休農地を耕したり、苗作りや、収穫、湿地の落ち葉かきなどの農作業に参加する機会を得ました。農作業のような厳しい労働をすることは、特に都会では稀なことです。農地で働く人も少なく、そのことが農作業を貴重なものにしています。この昔ながらの仕事は、若い世代にとって魅力的でなくなっています。農作業に興味を持ってもらうために、NPOのLEAFは、農作業に参加したいボランティアや地域住民に門戸を開いています。農地プログラムでは、地域住民はどのように農地が運営され、機能しているのかを学びます。私たちが学んだのと同じような実践的な技能を経験します。

生物多様性が保持された場所はまた、若い世代が自然体験学習をする格好の場となります。彼らに、自然と自分たちの日常生活がどのように関わり合っているのか、環境保護の大切さを楽しみながら理解してもらうことができます。また学校内の学びを補完します。

ESDの重要な構成要素としての環境教育は、市内の学校との強い協力関係から生まれます。大学関係者、地域行政、市民社会団体などが密に協力し合う必要があります。環境教育は、環境の概念や原則をすべての教科学習に統合することです。科学の科目だけにかぎらず、数学や家庭科、さらには体育といった科目にも統合されるものです。

市民社会団体であるLEAFの役割は環境保護、保全について専門性を提供することです。インターンシップ・プログラムで私たちが見学したあるプログラムは、ESDを実践する教育者の意識と理解を醸成するものでした。教育者を教育することは、重要なことだと思います。彼らはそこで得た知識を生徒に伝えることができ、彼ら自身も学ぶことができるからです。

アース・ウォッチング・クラブ（EWC）は、生徒に（大人にも）環境活動に参加させる仕組みを作っています。EWC環境パネル展では、西宮市内の生徒だけではなく世界中から送られてきた環境に関する様々な作品を目のあたりに見ることができました。私たちは、準備から関わり、開会前に作品を見学することができました。

持続可能な発展を促すために地域レベルで教育を活用するESDにおいては、市民社会団体、企業、地域行政、大学、一般市民による密接な協力、参加が肝要です。インターンシップの中で、これら異なるセクターの人々による効果的な意思疎通、協力体制が見られました。それぞれのセクターが、環境に対する意識の向上や環境保護を進める観点から、自分の役割や強みを認識しています。どの団体も、それぞれのやり方で持続可能な発展に向けて努力しています。

兵庫県の水産業の現状を学ぶ（兵庫県漁業協同組合連合会）

密接な協力関係を示す具体例としては、西宮市内で行われているエコ・コミュニティ会議があります。エコ・コミュニティ会議では、住民がそれぞれの地域で関心のある事項について、住民の意識を高めようと、ボランティアで時間と労力を提供しています。内容は、ごみや公害、気候変動から文化の継承まであります。同会議は、住民の意識向上のためだけに作られたのではなく、住民が自分たちの取組みの成功に向けて、活動を検討することができます。インターンシップで、私たちはエコ・コミュニティ会議やその活動に参加することができました。

上述した３つの要素以外にインターンシップで学んだ重要なことに、組織マネジメントがあります。組織マネジメントは、計画やプロジェクトを成功に導くためのカギとなるものです。小川氏は講義の中で、目標に効果的に向かって進むために、多様なスケールで事業を展開する組織についての主要な枠組みを説明しました。私たちは、異なるステークホルダーが参加する企画会議を傍聴し、参加する機会を得ました。LEAFが組織としてどのような動きをし、チームとして持続可能な発展を推進していくのかを見ることができました。

2011

1/11 ESD講義⑦
「ESDの考え方(3)」
西宮市におけるESD推進ビジョン策定に向けた考え方やESDが求めている育みたい力とはどのようものかについて紹介した。

1/13 甲東エココミュニティ会議
活動発表展見学
定例会議参加

1/15 甲山湿原落ち葉かき作業
湿原の保全を図るため、市民ボランティアとともに湿原に堆積している落ち葉の除去を行った。

1/17 ・ESD推進ビジョン策定にあたっての意見交換
・環境パネル展2010
海外出展作品整理

1/18 ・西宮市国際交流デー出展内容検討
・国際防災シンポジウム2011
「コミュニティ防災の挑戦：気候変動対応への道のり」
コミュニティは気候変動と災害にどう適応すればいいかをテーマに、政府、大学、NGO関係者から高校生までの幅広い報告者から、アジア諸国、日本の事例発表が行われた。テーマへの理解を深めるとともに、報告者や参加していた他大学の留学生やJICA研修生らと交流した。

1/20 西宮市国際交流デー
出展準備

1/22 ESD推進ビジョン策定検討会
西宮市におけるESD推進ビジョン策定に向け、乳幼児から大学生までの教育カリキュラムとESDの関連付けなどについての教育関係者による検討会に参加。「持続可能な社会を構築する上での社会が抱える課題」、「持続可能な社会を担う人材に求められる力とは」といったテーマでワークショップを行い、日本人参加者とESDについての意見交換、考えを共有した。

1/25 ESD講義⑧
「ESDの考え方(4)」
国レベルでのESDの考え方や文部科学省の新学習指導要領に「持続可能な社会をめざす」などの方向性が明示された状況を説明した。

1/28 ・東海市職員視察対応見学
・エココミュニティ会議
関係者勉強会(2)

1/31 EWCニュース
発送業務

Alma Bernadette L. Regalado

PHILIPPINES

レガラド、アルマ・バーナデット・リガユ

ミリアム大学

専攻：環境マネジメント
研究テーマ：再生可能エネルギー、水質汚濁技術、廃棄物処理
参加理由：日本で持続可能な生活に向けてどのような環境教育を行っているか知り、それを自国でどう適用できるか探るため。異なる文化を知り、経験する機会でもあると思った。

私がLEAFの活動で興味を持ったものを以下にあげます。

(1)世界的なパートナーシップ

2011年3月4日から5日に西宮市民ギャラリーで行われたパネル展は、LEAFが環境問題に対する人々の意識向上の関与の度合いを示すものでした。16カ国の小学生が出展しました。他の国の子どもたちが、人間が作り出した環境問題をどのようにとらえているか、作品を通じて知ることができました。

(2)自然体験活動

甲山で小学生と、また農地で地元の人達と一緒に自然体験をする機会が何度かありました。自然活動は、私たちの周りにある山や川、湖や森といった自然を理解し観賞する一つの方法です。子どもたちは自然に親しむことで、私たちの地球がこれ以上悪化しないように守るにはどうすればいいか理解することができます。また、私たちそれぞれに環境を守る責任があるのだ、と認識することができます。自然のありがたみを知ることで、それらを持続可能な方法での利用、つまり森や海洋、湖、空気、水、農地を損なうことなく利用しようという意識が育ちます。

(3)地域に根ざした教育

LEAFがエコカード事業でいかに地域を巻き込んでいるか知り、驚きました。地元の商店主や行政を巻き込むことは活動を進めていく上で大変重要です。教師は、生徒たちが属している社会の持続可能性に彼らが貢献するよう育成する、重要な役割を担っています。子どもたちは、環境に優しい活動によって、自分たちの社会をより良い場所にするための技能を備えます。エコカードは、環境への責任を人々に理解させます。活動は、人口増や生活様式の変化があっても、持続可能な暮らしへとつながっていくでしょう。

LEAFの活動に参加することで、持続可能性は日本だけで差し迫っている問題ではなく、途上国でも問題であると、深い理解を得ました。持続可能な暮らし方は、経済、文化、政治、社会の面で、国によって異なった見方がされます。共通するのは、地域コミュニティが、持続可能な社会を構築する上で主要な部分を占めているということです。地域住民が、環境への影響を減らすような賢い暮らし方をし、未来の世代のニーズを考えて、貴重な天然資源が彼らの手に渡るようにすることが大事です。

私たちは色々な面で相違しているかもしれませんが、ひとつの共通目標を共有しており、それは質の高い生活を持ち続けることです。LEAFが共通の目標を達成すべく、まとめようと努力しているステークホルダーは、住民、地域組織、行政関係者、企業、学校です。彼らはLEAFが彼らのニーズや優先順位をもとに街づくりや活動をコーディネートしている、持続可能性の指標です。

西宮で暮らすことで、持続可能な地域の一面を知ることができます。西宮には緑地がそう多くはありませんが、近所の家を見ると植物を育てている家が多くあります。住宅地では、子どもが学校から歩いて帰り、路傍には自転車を止める駐輪スペースがあり、小さな空き地では年配の住民が野菜を育てて世話をしており、スーパーマーケットへ買い物へ行く人が再利用できる袋を持ち、多くの店でゴミの分別のための容器を備え、水路にはきれいな水が流れています。これらは持続可能な地域のすべての面を表しているわけではありませんが、住民がどこへ向かっているか示すものでもあります。

フィリピンの私が住む街で、西宮の街のように子どもが学校から歩いて、また自転車に乗って帰る、そんな光景を目にすることができればと思います。住民がそれぞれに再利用できる袋を持って買い物に行き、学校や企業が太陽光発電や緑化屋上を行い、水路にはきれいな水が流れる。そして、野菜や果物を育てている土地がある、これで完成です。結局のところ、理想的な考えは、悪いことではありません。LEAFの事業に参画することを楽しみにしています。私が自国に帰った時、応用できることは全て応用するつもりです。

高等学校での環境学習「10年後の暮らしや社会への不安」について、高校生と考える

2/1
・小学校の環境体験授業
（野鳥観察　平木小学校3年）
・ESD講義⑨　「ESDの考え方(5)」

2/3
・環境パネル展
海外作品展示準備
・甲山農地苗づくり作業

2/4
・甲山農地苗づくり作業
・環境パネル展海外作品展示準備

2/7
環境パネル展案内
チラシ発送作業

2/11
西宮市国際交流デー
出展準備

2/13
西宮市国際交流デー出展

（財）西宮市国際交流協会主催の国際交流デーの「バザーと展示コーナー」に、14出展団体の１つとして参加した。インターン生出身国やLEAFでのインターン活動の様子を紹介した。

2/25
・ESD講義⑩　「ESDの考え方(6)」

1月22日に行ったESD推進ビジョン策定検討会の検討結果を受け、持続可能な社会を担う人材に求められる力「育みたい力」について、0才から22才までの年代区分毎（0-6才、7-8才など）に求められる力を検討し、割り当てた。これは、次回の検討会（3月11日）の資料として活用。

2/27
コープこうべ第2地区本部主催イベント
「コープファミリーフェスタ」への協力

LEAF事務所が入居している建物にて行われた生活協同組合コープこうべが催す事業「コープファミリーフェスタ」に協力し、インターン生はクイズ問題を考え、当日は来場者の応対を行った。

2/28
・EWC環境パネル展作品展示作業
・NPOの組織運営(理事会)を学ぶ
JICAチリ研修生との交流

LEAFの第3回理事会に同席し、議事進行の様子を実際に見学することで、NPOの組織運営について理解を深めた。理事会後に行われた交流会では、LEAFにて受け入れ中のJICAチリ研修生、LEAF理事･スタッフと意見交換を行い、親交を深めた。

Kathleen Catherina Pontoh

INDONESIA

ポントー、キャサリン・カトリーナ

サムラトランギ大学

専攻：商法
研究テーマ：ローン借入者への法的保護
参加理由：どのようにして消費者が、消費者自身の健康や安全、また環境にとって良い製品を得ることができるか知りたかったから。自分の子どもの未来をより良くするため。

LEAFでESDについて学ぶ機会を得て、嬉しくまた光栄に思います。私がこれまでにLEAFで見聞きし、学んだことから理解したのは、LEAFは単なる組織ではなく、環境問題について、人々の関心を引き出し、推進する力を持ち、思いやりさえあり、責任ある行動をとる団体だということです。

環境活動をどのように導き助言を行うのか、環境学習活動のシステムをどう構築すればいいか、自然体験活動をどのように推し進めればいいか、地域のリーダーをどのように育成すればいいか、地域の異なる分野の人たちとどのように協力関係を築くか、どのような環境学習ツールや情報を提供するかを学びました。

加えて、地域社会のあらゆる層の人たちとどのように良い関係を築いていくか、環境学習を通じた持続可能な地域社会の構築のためにどのように市民、企業、地域行政がパートナー関係を築くかを学びました。これは、LEAFおよび西宮のあらゆる立場の人々が、環境問題が一面的な問題ではなく、地域住民全員の協力を必要とする住民共通の問題であると認識していることを示しています。

私は、環境学習都市宣言（2003年）と、同宣言を踏まえた新環境計画（2005年）に大変感動し、興味を持ちました。宣言は、西宮の全地域住民、企業、行政が、次世代のために持続可能な環境の実現に向けて力を合わせていく決意の表れです。これは持続可能な社会の構築という人間にとって永遠の課題が、まちづくりの基本理念であると示すものです。宣言は、私の出身地でも、そこに住む人々にも適用できることを教えてくれました。

セレベス島北部のマナドは小さな街ですが、西宮と類似点があります。ですから、この私の街マナドは、街が人を育み、人が街を育む西宮の環境学習都市としての経験を取り入れるのに、適した街です。

特に西宮のごみ処理制度について、よいごみ処理制度に向けた市民の意識付けの仕方、ごみの分別の仕方について、もっと学び、それを取り入れたいと思います。私の街では、ごみ問題は、すでに深刻な問題となっており、危機的状態です。ごみ問題が原因で、住民が様々な健康問題にさらされています。お粗末な廃棄物管理が数々の公害を引き起こし、その結果、住民は下痢、腸チフス、テング熱を患っています。終わりが見えない状態です。ですから、これらの問題に終止符を打つために、西宮で適切なごみ処理の方法を学びたいと思います。母国に帰り、ここで学んだ一つひとつのことを活かせればと思います。私は、環境活動の進展を観察しつづけ、知識を共有し、問題解決にあたりたいと思います。環境問題は特定の地域の問題ではなく、世界共通の問題だと考えます。

私は、子どもへのESDについて、とても関心を持っており、深く知りたいと思います。未来の世代に環境への愛情を育むことは大切だと考えます。幼いころに環境への意識づけをされることで、子どもは自分たちの行動が未来にどう関わっていくのか、環境に対する責任感を育んでいきます。いかなる人間の活動も環境に影響を与えます。だから責任を持った活動をすることが必要です。また、親が環境の持続性について、子どもを動機づけることは大切です。大人が意識とやる気を持つことが、環境の持続性につながると思います。子どもは親の背中を見て育ちます。親の模範的な、環境に対する責任ある行動は、結果として、子どもの環境への強い責任感につながります。

LEAFでのインターンシップでは、ESDについて、もっと学びたいと思います。そして、学んだことを、私の住む街で地域住民と共有したいと思います。インドネシアにもESDプログラムはありますが、真剣に取り組まれていません。西宮のESDについて私がLEAFで得た経験や知識を、共有したいと思います。私の家族、近所、教会、職場といったごく身近なところから、人々が環境へ愛情を持つように意欲を起こさせ、彼らがどのようにすれば清潔で環境に優しい生活様式を持てるか気づいてほしいと思います。

これからもLEAFとつながり、持続可能性な環境の維持と育成についての知識や経験を共有したく思います。持続可能な環境を守り、育てていくことについて私がLEAFや西宮市民から得た知識や経験はすべて、私の街の人々に共有するつもりです。

ESD推進ビジョン策定にあたっての意見交換

3/5
エココミュニティ会議交流会

EWC環境パネル展会期中に行われたエココミュニティ会議交流会に参加し、市内に17つあるエココミュニティ会議のメンバーによる意見交換を傍聴した。エココミュニティ会議を運営するメンバーが一堂に会する場所に同席することで、各地域でどのようなメンバーがどのような活動をしているのか、知る機会となった。

3/6
環境パネル展
表彰式・作品撤去

EWC環境パネル展の共催団体が優秀作品を選び、賞を授与する式に同席した。どのような子ども達がどのような作品を作り受賞したかを知る機会となった。来場した子ども達との交流の場ともなった。また、終了後、撤収作業を行った。

3/7
3/8
レポート作成

3/11
・環境パネル展海外作品
感謝状送付準備
・農地作業

EWC環境パネル展の海外出展者（約390人）に送付する感謝状の作成を行った。

農地では、新たな活動拠点となるエリアの整備や夏野菜の苗の植え替えなどの作業を行った。

3/10
兵庫県立大学国際シンポジウム

兵庫県立大学主催の「環境・経済・エネルギーの将来を考える」国際シンポジウム（日英同時通訳）が兵庫県立大学神戸学園都市キャンパスで開催され、海外からは中国広東省碧南大学が、オーストラリアからはカーティン大学がこれに参加していた。本シンポジウムに参加し学習した。

3/14
エコアクションニュース発送

3/17
・甲東エココミュニティ会議定例会
・インターンシップ前期まとめ

Nguyen Hoang Dung

VIETNAM

グエン、ユン・ホァン

ダナン工科大学

専攻：環境工学
研究テーマ：地域に根ざした環境教育、社会心理学
参加理由：日本でどのように持続可能な発展が行われているか知るため、日本人学生や留学生と共に人生経験や異文化体験を積むため

日本に来るまでは、NPOの活動や日本人の働き方について、あまり知りませんでした。ですから日本の非営利組織の職員と出会い、共に働く機会を得たことを大変嬉しく思います。また、国際的な会議に参加することもでき、多くの知識を得るほか、有用な体験をしました。

武庫川女子大学付属高校では、小川氏が生徒に日本の社会問題や環境問題について講義しました。生徒たちは持続可能な社会の必要性を認識しました。講義の後、生徒は生活の中の基本的な事柄について質問票を受け取りました。食べ物、自然、災害などについて焦点をあてたものです。これらの質問はシンプルで効果的であり、生徒が教えられたことを記憶するのに役立つものでした。

ふるさとウォークの準備会議に参加し、地域で行われるイベントをいかに丁寧に準備するかを知りました。準備物や道案内、集合地点、トイレなどについて確認しました。ふるさとウォークでは、市民は持続可能な社会に向けて、環境や自然、防災について学ぶ機会を持ちました。私は、子どもから年配の方まで、イベントに参加した人たちの熱意にとても感心しました。13の団体が各ポイントでクイズを出し、道案内をしました。各団体の環境に対する熱意と責任感が表われていました。さらに、LEAFは市民と行政の関係づくりをうまく促進してきました。これは環境学習にとってとても大切なことです。仕事のやり方に関して、私は相違点と発展に気づきました。日本では、ほとんどの活動には、実践と同時に理論があります。クイズをすることで、参加者は持続可能な社会に向けて無理なく学習するのです。この方法はとても無駄がなく、効果的だと思います。

高須東保育所での見学では、環境教育プログラムが子ども（0歳児）から生徒までを対象にしていることを知りました。幼いころから環境教育を受けることで、習慣づけられ、良心が育ちます。そして教師は子どもに学びや気づきを促します。

しめ縄作りは地域で行われる行事で、古い日本文化を知る活動でもあります。この活動には非常に興味を持ちました。加えて、この活動で日本人と交流する機会を得、簡単な作業を通じて日本人の働き方を観察することができました。自然に近い活動としては、甲山湿原での落ち葉かきを行いました。

環境パネル展では、日本だけでなく、チリやネパール、パキスタンといった海外の国々とも交流しており、素晴らしいと思いました。展示の準備をして、展示作業という大きな仕事の指示と分担の仕方を学びました。それにより、短い時間で展示作業を終えることができます。展示作品を準備したり、エココミュニティ会議に参加し、パネル展の準備をし、ニュースの配布作業をして、日本人の働き方はとても勤勉、丁寧、思慮深く、賢いと思いました。私もこのようなことを学ばなければと思いました。

インターンシップ・プログラムで、LEAFが運営する多くの活動に参加しました。そして、これらの活動が環境教育や持続可能な社会につながっているのだと理解しました。加えて、NPOでの働き方、仕事の仕方を知りました。少ない人員ですが、とても効果的な仕事をしています。

このコースを通して、生活様式や社会は教育的なやり方、または政策によって変えることができると知りました。ですから、教育は持続可能な社会を実現するための安全な道のりであると思います。

私は、ダナン市で環境教育プログラムを立ち上げたいと思います。2010年のダナン市の目標は、「エコ・シティ」です。エコ・シティは、持続可能な発展のための教育なくしては実現しません。ですから、私はベトナムに帰ったら、自然環境や社会の状況全体を調査し、住民によるESDの計画立案ができればと思っています。現在、ダナン市役所はエコ・シティを標榜しています。私の考えを実行するにはいい状況だと思います。

ダナン市は自然や豊富な環境に恵まれた、人口約80万人の若い街です。海岸線、ソントラ湾、バナ山、ソントラの森など、自然はとても豊富です。特に、ソントラ森林保護区はダナン市がエコ・シティを目指す上で大きな強みです。そこは保護区ですが、人々が訪れることができ、自然や動物を観賞することができます。しかし、急速に開発され、うまく管理されているわけではありません。行政その他の機関による管理はり、住民が自然に親しみ、環境的な生活を送るための状況を整える必要があると言えます。

半年を終えて、アジアや世界の多くの国々の環境問題について学びました。そして、それぞれの国で持続可能な発展を目指す必要性があることを知りました。異なる文化、特に日本文化について触れ、学びました。将来、私のホームタウンであるダナン市で、私の環境についての考えを発展させていきたいと思います。

4/9
・下半期の活動概要
・夙川見学

4/11
市民活動カード、
エコ活動のてびき発送

4/12
西宮市ESD推進ビジョンの
とりまとめ報告

4/14
西宮市生物多様性
地域戦略検討委員会
（まち部会）傍聴

4/18
EWCニュース発送

4/19
EWC20周年記念シンポジウム
海外メッセージ企画準備

EWC20周年記念シンポジウムにおいて、EWCプログラムの国際交流活動の紹介をインターン生が担当する。

これまでに親交のあった海外の環境活動グループへの連絡、またインターンシップで学んだ事を踏まえた来場者へのメッセージを作成した。

4/21
EWC発送作業

4/25
EWCニュース発送

4/26
ESDで育みたい力と小学校における応用
環境学習サポートガイドの活用

日本の教育制度の枠組みや西宮市における保育所から高校までの設置状況についての概略の説明を行った。また、教育界における基礎学力の向上と総合的な学習の時間を巡る時間数の変遷、ESDの概念を導入する上での課題などについて説明した。

VIETNAM

トウロン、チー・ミン・アン

ダナン工科大学

専攻：環境工学
研究テーマ：二酸化炭素排出削減
参加理由：ESDについての知識を深め、日本を知りたかったから

インターンシップは、私が持続可能な発展のための教育（ESD）について、また、日本が、具体的にはLEAFがどのように地域でESDを推進してきたかを詳しく理解することのできた貴重な期間でした。

この2カ月、子どもを対象にした、地域レベルにとどまらず、国際的レベルにおいても、環境教育に関連した多くの活動に参加しました。日本の学校を訪問し、日本での子どもに自然環境への関心を育てるやり方に、感銘を受けました。子どもが長く環境に関心を持つためには、環境と接点を持ち、食育やエコカード、冊子などの活動を通じて環境を理解することは必要だと思います。子どもは社会の未来を担います。ですから、彼らが環境に関心を持てば、大人になってからも環境に配慮した行動をとるでしょう。このようにして、私たちはESDを推進するのだと思います。

私は、環境問題がようやく近年になって論議されるようになった開発途上国から来ています。特に、ごみ問題は大きな問題となっています。現在の世代はごみの処理について、よい行動習慣をもっていません。人々はどこにでもゴミを捨てます。これが不健康な住環境を作り出します。加えて、私たちの地域では環境についての意識が欠けています。開発について決断を行う時に、環境的側面を忘れる傾向があります。短い期間でこの習慣を変えるのは難しいでしょう。これまでずっとこのやり方で来た人が変えるのは、もっと難しいでしょう。私の考えでは、子どもたちや若い世代に環境の意識を芽生えさせる教育を始めることが、今、最も効果的だと思います。これからの10年の間に、環境に関心を持つ新しい世代が生まれます。加えて、子どもを教育することで、その親に影響を与えることができます。このようにして徐々に影響を及ぼすことができるでしょう。

インターンシップで参加した意義深いイベントとして、環境パネル展があります。私たちは、展示の準備、冊子の送付、設営作業、表彰式の手伝い、撤収を行いました。この国際的な展覧会のほぼすべての段階に参加しました。私はこのような仕事はしたことがありませんでした。ですから、多くの新しいことを学びました。自国に帰ったら、このような活動の準備をすることができると思います。イベントに参加して、社会的な活動の経験を得ただけでなく、子どもや15カ国の国々のことについて学ぶ機会を得ました。国や状況に関わらず、子どもは純粋な瞳を持っていて、大人の持っていないような視点で現実を見ます。子どもたちは作品を通じて、彼らの世界観を表現していました。彼らの作品を見て、彼らの生活を想像することができました。

パネル展は、ESDを世界の国々にも広める役割をしています。子どもたちにもっと世界的な視点で考えることを促し、環境を守る上での彼らの役割を気付かせます。また、過度な汚染を防ぐ活動において、世界の国とのネットワークができます。

また、兵庫県立大学で行われた国際シンポジウムは、私が参加した中で大きなイベントでした。植田和弘教授の特別講演「持続可能な発展の環境経済学」に関心を持ちました。「地球の温暖化に対処するということは、私たちがチャンスを得るということだ」という言葉と、「緑の経済成長」という概念をとても明快に説明されたことが印象深かったです。子どもへの環境教育の点では、エネルギー消費の面白いゲームがありました。子どもが電子製品を使うと、氷が溶け、ペンギンが海に落ちていきます。電子製品を使えば使うほど、多くのペンギンが死ぬのです。このゲームはとても説得力があると私は思いました。

私はインターンシップに満足しており、この後のインターンシップを楽しみにしています。ありがとうございます！

EWCエコメッセンジャー活動表彰盾作成

5/3
西宮市貝類館イベント支援
貝類標本コレクションづくり

5/4
西宮市貝類館イベント支援
夙川河口生物調査

貝類館が市民対象に行った夙川河口域での生物調査に参加した。貝類をはじめ、魚類や甲殻類などを実際に採取し、その同定や環境とのかかわりについて学習した。参加した親子との交流もできた。

5/10
甲山農地　田んぼ代掻き
野菜苗付け

5/17
LEAF通常総会議案の説明

LEAFの通常総会に参加するため、通常総会で提案する内容やNPOの組織運営の方法などについて事前学習を行った。H22年度事業報告、決算報告、H23年度の事業計画、予算、職員の労働条件などの説明を行った。

5/20
・EWC20周年記念シンポジウム
会場設営
・LEAF通常総会出席

5/21
西宮市EWC20周年記念シンポジウム
スタッフ参加

20年目を迎えた「地球ウォッチングクラブ・にしのみや」（EWC）事業を振り返り、今後の展開を考える記念シンポジウムに参加した。インターン生は準備として、これまでＥＷＣ事業に関りのあった海外関係者へ祝辞を依頼し、当日は届いた文章を代読した。また、会場の準備、撤収も行った。シンポジウムに参加したパネリストの意見を聞き、ＥＷＣ事業20年の歩みを知る機会となった。

5/26
甲山農地　田んぼ田植え
野菜苗付け

甲山農地の田んぼにおいて、稲の苗を手植えした（全員が初めての体験であった）。

また、6月から始まる「こども農業塾」の畑で雑草を抜く作業などを行い、農地の整備を行った。

5/31
保育園児対象
自然体験甲子園浜での生き物観察

環境省の鳥獣特別保護区となっている甲子園浜において、近隣の民間保育所が5歳児を対象に行う生き物観察に参加し、幼児を対象とした環境教育の実践を体験するとともに、活動支援を行った。